OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	理工系大学院英語プログラム留学生の日本語学習とキャリア形成 : 研究室の環境とコミュニケーションの観点から
Author(s)	卓, 妍秀; 福良, 直子; 和嶋, 雄一郎 et al.
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2025, 29, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

理工系大学院英語プログラム留学生の日本語学習とキャリア形成

―研究室の環境とコミュニケーションの観点から―

卓　妍秀*・福良　直子†・和嶋　雄一郎‡・村岡　貴子§

要　旨

本稿では、英語プログラムに在籍する理工系大学院留学生を対象としたアンケート調査とインタビュー調査を実施し、学習・研究活動における日本語使用の実態およびその認識の変容を明らかにした上で、今後一層多様化の進行が見込まれる留学生のキャリア形成に対する支援には、何が求められているのか、その本質を明らかにすることを目的とする。70名を対象としたアンケート調査の結果からは、英語プログラムの留学生の多様な背景や、選択的な言語使用、キャリア形成への迷いや悩み等の実態が明らかにされた。一方、2名を対象としたインタビュー調査では、SCATの手法を用いて質的に分析を行った。その結果、個々の研究室での日々の生活やインターンシップといった学外での経験も含め、留学生が自身のキャリアを、自身の留学経験からどう志向し、そのために何が必要であるかを熟考する過程を、十分に経験しつつキャリア形成への意義づけを行うことが重要であるとの知見を得た。以上から、キャリア支援は、言語学習や研修の機会等の容易な選択肢をパッケージとして提供するものではなく、多様な背景を持つ留学生自身に、内省を促し、自身の選択に根拠を持たせて言語化できる程度に深く思考することへ誘う支援に本質が認められると言える。

【キーワード】英語プログラム、大学院留学生、キャリア支援、選択的な言語使用、内省

1　はじめに

日本の高等教育機関における、英語による授業等で学位取得が可能な英語プログラム（以下、英語プログラム）の展開は、日本語を母語としない留学生が英語のみで学術活動を行うための選択肢を広げるものである。堀内（2021）によると、2009年から5年間の競争的資金事業として実施された「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（以下、グローバル30）」開始から約10年で、英語プログラムの数は、学士課程で5.2倍、大学院で1.5倍に増加している。このように、近年、日本の大学では、英語プログラムの普及が顕著であり、同プログラムの拡充により、大学の国際化を促進し、多様な学生を受け入れるための基盤を強化することが目指されてきた。

特に大阪大学は「グローバル30」に採択されて以降、英語による学位取得プログラムを積極的に推進しており、2024年度現在、理工系分野において12の英語プログラムを提供している。これにより、英語を主要な媒介言語とした高度な教育と研究が可能になり、多様性に富む学習環境が整備されつつある。

しかし、英語プログラムは日本語学習が必須とされない場合も多く、日本国内でのキャリア形成を希望する留学生にとっては、日本語能力の不足が就職活動や職場での適応における大きな課題となっている。

村田（2024）は、英語プログラムにおける日本語

*　大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター・教授
†　大阪大学国際教育交流センター・講師
‡　名古屋大学高等教育研究センター・特任准教授
§　大阪大学国際教育交流センター・教授

科目の位置づけのあいまいさを指摘し、「生活のための基礎の日本語科目は提供されていても、それ以降の日本語学習に関しては、やってもやらなくてもよいグレーゾーンとなっていることが多い」と述べている。

また、湯川（2020）は、留学生の日本語能力向上と職場適応の関係を体系的に検討し、企業内での支援策の構築が必要であると指摘しており、日本企業では業務遂行や人間関係の構築に日本語能力が不可欠であるため、たとえ高度な専門知識を持つ留学生であっても日本語能力が不足すると職場での円滑なコミュニケーションやキャリア形成に支障をきたすケースが報告されている。加えて、日本政府は日本経済のさらなる活性化を目的として、高度な外国人人材の活用を重要視しているものの（日本学術振興会2024）、理工系分野の留学生が日本でキャリアを構築するには、日本語の習得が不可欠であるとの認識が強まっている。

このような状況を踏まえ、卓他（2024）では、理工系分野の英語プログラムに在籍する大学院留学生70名を対象としたアンケート調査の結果より、英語プログラムにおける日本語教育の意義の変化を指摘した。すなわち、日本語教育は、在籍期間中に限定された学術活動を支援する一手段から、中長期的な日本滞在期間におけるキャリア形成に有利に働く条件整備要因へと、その意義が変化しているものと言える。また、キャリア形成に対して「日本企業への就職」、「日本語が必須ではない外資系企業への就職」、「母国での就職」といったさまざまな志向が見られ、日本語学習への意欲の保持および実際の学習の継続とキャリア形成に対する志向との密接な関係性が示唆された。

すなわち、日本国内での就職志向という、留学生のキャリア形成の一側面のみを取り上げるのではなく、多様なキャリア形成に対する支援の観点から、日本語学習を捉え直す必要があるものと考えられる。

卓他（2024）で得られた結果を基に、本研究では、英語プログラムに在籍する理工系大学院留学生を対象に実施したアンケート調査の結果を簡潔にまとめ、さらにインタビュー調査を行った結果を報告する。本稿では、学習・研究活動における日本語使用の実態およびその認識の変容を明らかにした上で、今後ますます多様化していくと考えられる留学生のキャリア形成に対する支援には、何が求められているのか、その本質を明らかにすることを目的とする。

2　先行研究と本研究の位置づけ

ここでは、理工系大学院留学生のコミュニケーションおよびキャリア支援に関する先行研究の知見に基づき、本研究の位置づけを述べる。

2-1　理工系大学院留学生のコミュニケーションに関する研究

村岡（2003）は、理系大学院留学生を対象にインタビュー調査を行い、研究室内でのコミュニケーションにおける課題を指摘した。具体的には、適切な敬語の選択、会話の継続のための話題設定、および複数人との議論の進行が難しいと感じる留学生が多いことを明らかにしている。重田（2008）は、工学専攻の博士課程の留学生と日本人学生を対象にインタビュー調査を行い、留学生が研究室の慣習と人間関係の複雑さを把握する上で直面する課題を掘り下げ、研究室での生活で求められる日本語能力と知識、研究室という学習環境のデザインの必要性等を明らかにした。その上で、研究室で暮らしていくための日本語能力や知識を得た留学生と、留学生への配慮の視点をもった日本人学生との有機的なコミュニケーションにより、より意義のある学習が生み出されると指摘している。

羽吹・篠原（2014）は、理工系大学院留学生を対象に、大学生活および日常生活における日本語使用状況を調査したものである。研究活動においては英語が主に使用されているが、指導教員や研究室のメンバーとの研究関連以外のコミュニケーションでは日本語が多く使用されており、日常生活においても人間関係の構築には日本語が不可欠であることが示された。深川・高畠（2018）の研究では、理工系大学院留学生が研究および学習活動で日本語の必要性に直面する状況を探るアンケート調査を実施し、たとえ研究において英語を主に使用していても、研究室内の会話や授業参加には日本語能力が求められるケースが多いことを明らかにした。

先述の卓他（2024）では、理工系分野の英語プログラムに在籍する大学院留学生は、日常生活におけるコミュニケーションや研究室内でのディスカッションに関しては、学生の日本語能力によっては日本語が使用される傾向にあることが明らかになった。

また、研究活動に母語が使用される場合もあり、専門的な話題では、使用言語が選択的に使い分けられる傾向が見られた。さらに、専門用語の理解や学術的なプレゼンテーションの場面では、英語の使用が好まれていた。学会では、口頭発表は主に英語で行われるものの、ポスター発表では日本語が使用されるなど、学術的な言語活動にも、言語の選択に柔軟性が見られた。

これらの先行研究からは、コミュニケーションの場や目的によって、必要とされる言語および使用される言語が流動的に変化する、理工系大学院留学生を取り巻く複雑な環境の実態がうかがえる。本研究は、英語プログラムに在籍する理工系大学院留学生を対象に、コミュニケーションの場や目的に応じた、日本語を含めた言語の選択的使用の実態を、留学生のインタビューデータの分析により、その認識も含め明らかにしようとするものである。その上で、研究室の環境とコミュニケーションの観点から、英語プログラムにおける理工系大学院留学生の日本語学習とキャリア形成支援について再検討を試みるものである。

2-2　留学生に対するキャリア支援に関する研究

渡部（2020）は、宮城（2002）を引用し、キャリアは一般に職業・職務内容に関わるものを示す狭義のキャリアと、「生涯・個人の人生とその生き方そのものと、その表現のしかた」である広義のキャリアがあり、近年キャリアの概念は、職業・職務にとどまらず、統合的に「ライフ・キャリア」として捉えられるようになったと述べている。さらに、Hughes（1958）を踏まえ、キャリアを考えるもう一つの枠組みとして「客観的キャリア」と「主観的キャリア」を挙げている。「客観的キャリア」とは、職務内容や地位、給与など他から把握できるものであり、「主観的キャリア」とは、個々のキャリアの意味づけや働き方に関わる価値観など、他からは見えない個人の内面に関わるものであると述べられている。またサビカス（2015）の「言語は自己の内省を行い、自己概念を形作り、自己と社会を調整する役割を持ち、同時に主観的キャリアをつくるものである」との主張を基に、キャリア支援における日本語教育には、ビジネス日本語や就職活動に必要となる日本語といった「ツールとしての日本語」習得と「自己概念を表出するための日本語」習得の支援の２つの要素があると指摘した。

また、留学生に対するキャリア形成支援体制の実現への課題を追求したものとして、寅丸他（2019a；2019b；2023）の一連の研究が挙げられる。寅丸他（2019a）は、留学生と教員、留学生と教育機関、さらに教育機関内部の関係者あるいは関係組織間における認識の「ずれ」が存在することを指摘している。さらに、寅丸他（2019b）では、留学生と教員の間には、キャリアの捉え方に対する「ずれ」があることが述べられている。すなわち、キャリアをワークキャリアという短期的視点から捉えるのか、ライフキャリアという長期的視点から捉えるのかという「ずれ」である。上記を踏まえ、寅丸他（2023）では、留学生のキャリア形成には、個人、身近な他者、教育機関・支援者・支援組織、企業や地域等のコミュニティ、社会制度といった複数の層の問題が関わっており、具体的な支援を行うには各層内および各層間の連携が必要であることが指摘されている。

英語プログラムの学生を対象とした研究としては、坂井（2021）がある。名古屋大学の留学生のニーズ把握や支援策検討のためのアンケート調査の回答を英語プログラム学生と非英語プログラム学生で比較し、大学内でのキャリア支援を含めた留学生支援体制について論じている。留学生に対し、日本企業への就職だけを想定した支援を大学が行っても、留学生の持つ多様な文化的背景や進路選択の可能性を踏まえたキャリア形成への支援に至らない恐れがあることが指摘されている。母国や第三国での就職、博士課程への進学、アカデミックポストへの就職といった多様な進路を希望する留学生に、日本企業への就職を前提とした「社会人基礎力の育成」（鍋島2015）および日本の就労慣習やビジネス日本語の指導を一方的に押し付けるだけでは、学術上の専門分野に加え、母語・英語・日本語などの複数言語を駆使し、国際的な活躍を目指す留学生へのキャリア形成を促すことは不可能であると述べている。

本研究は、先行研究ではあまり対象として扱われていない、理工系英語プログラムに在籍する大学院留学生のキャリア形成に対する志向を、先述の「主観的キャリア」の枠組みで捉えるものである。留学生の研究室における日本語の使用状況ならびに日本語や日本語学習に対する認識の変容をキャリア形成の観点から捉え、キャリア形成の過程およびその支援に求められる新たな視座を示すことを目指す。本

研究の成果は、「留学生の持つ多様な文化的背景や進路選択の可能性を踏まえたキャリア形成への支援」（坂井2021）に資するものと考えられる。

3　調査の概要

3-1　調査方法

調査に先立ち、筆頭著者の所属先部局において研究倫理審査を受けて承認を得ている。調査協力者に対しては、調査についての説明を書面で行い、許諾を得た。

2022年10月下旬から11月下旬にかけて、理工系分野の英語プログラムに在籍する大学院留学生を対象に、ウェブベースのアンケート調査を実施しインタビューへの参加意向についても確認した。その際に、回答者の属性（所属プログラム名、学年、日本滞在期間など）、日本語学習歴（学習期間、学習方法、学習目的など）および方法、在学中の日本語使用頻度（授業内外での使用状況）、卒業後の進路の希望（就職、帰国、進学など）、留学生活の満足度（学業、生活環境、人間関係など）に関するデータを収集した。

アンケート回答者のうち、インタビューに同意が得られた者の中から、本稿では２名を対象に半構造化インタビューを実施した。具体的には、日本語学習に対する認識とそれが将来のキャリア形成に与える影響について尋ねた。時期は、2022年12月から2024年２月までである。インタビューはオンライン形式で実施し、１名あたり２回、各１時間程度行った。

調査協力者の属性は表１に記載した。インタビューでは、留学生が日常生活で遭遇するさまざまな状況における日本語使用に関する態度、日本語学習への動機、およびそれを支える背景となる環境について尋ねた。

表１　　調査協力者２名の概要

仮名	出身地域	母語背景	在学段階
リーさん	東アジア	漢字系	博士前期
アンさん	南米	非漢字系	博士前期

3-2　分析方法

インタビューデータを文字化し、比較的小規模の質的データの分析にも有効とされるSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。SCATとは、セグメント化したデータについて、以下の手続きをとる分析手法である（大谷2019）。

まず、４段階でのコードのコーディングを行う。①データの中の注目すべき語句を抜き出す、②テクスト中の語句を言い換える、③ ②を説明するようなテクスト外の概念に変換する、④以上から浮き上がるテーマ・構成概念を示す。次に、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、最後にそこから理論を記述する。本研究では、ストーリーラインの記述を援用し、また、具体的な２名の語りを示しつつ、インタビュー内容を分析する。

4　結果と考察

本章では、キャリア形成に関わる日本語学習の状況を中心に、協力者へのアンケート調査の結果を分析し、続いて、２名のインタビュー協力者の事例を取り上げ、主観的キャリアに関してSCATを援用して質的に分析する。質的分析に際しては、研究室における日本語の使用状況や、日本語あるいは日本語学習に対する印象や見解、およびその変容等を示し、日本でのキャリア形成への見通しやそこに至る種々の背景について描くこととする。さらに、上記２点の分析から総合的に考察を行う。

4-1　キャリア形成における日本語学習

アンケート調査（n=70）の分析結果から、英語プログラムに在籍する理工系大学院留学生の日本語使用実態および進路志向について、以下の３点の傾向が特徴として挙げられる。

まず、回答者の37%が日本国内での就職を志望しており、日本語学習に対する高い関心が示された。実際に、日本語能力試験（JLPT）の受験を経験した者は44%にのぼる。こうした日本語学習への高い関心は有するものの、一方で、専門分野の学習との時間的制約や授業の成績のGPAへの影響に対する懸念等により、必ずしも体系的な日本語学習の機会を十分に確保できていないケースも散見された。このような課題については、今後より詳細に実態を把握する必要があると言える。

次に、研究活動においては、英語が主たる使用言語である一方で、研究室内のコミュニケーションでは日本語使用の頻度が比較的高く、研究室という特定の学習環境においては、場面に応じた言語が選択的に使用されている様子がうかがえた。特筆すべき点として、日常的なコミュニケーションや研究室内での非公式な対話における日本語能力の高低と実際の日本語使用の有無が、研究室メンバーとの交流による人間関係構築の質的側面に影響を及ぼす可能性の高いことが明らかとなった。この点については、次の章で質的な事例分析結果に基づき議論する。

さらに、キャリア形成との関連性において、日本での就職を志望する学生は早期から計画的に日本語学習に取り組む傾向がある一方で、進路が未定の学生においては、将来の言語面での不安が顕著であることが明らかとなった。進路が未定の場合、進学か就職か、また就職先やその場所（日本国内外等）についても、複数の選択肢を検討する必要がある。そのため、進路未定の状況では、その選択肢に影響する在学中の準備や使用言語への検討といった背景要因が多々関係することから、キャリアについて悩みを抱える場合も少なくないと推測される。これらの結果は、英語プログラムにおける、必要に応じた日本語学習支援の重要性を示すとともに、キャリア形成を見据えた体系的かつ計画的な言語教育の必要性を示唆している。加えて、進路未定の場合の情報提供や支援のあり方を、留学生の在学段階や時期等によって、慎重に検討する必要性があるものと言える。

以下の図1は、本稿で扱った英語プログラム在籍の留学生の背景や就職希望に関する情報をまとめたものである。

図1に示したように、英語プログラムの留学生は、研究活動等をほぼ日本語のみで行う他の留学生の場合とは異なり、選択的な言語使用の状況が見られ、そのことが、日本語学習や就職への希望についても少なからず影響を及ぼしているものと考えられる。

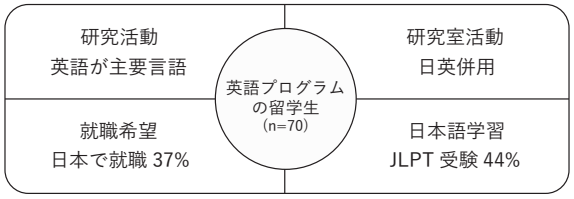

図1．英語プログラム在籍留学生の日本語学習に関する背景

4-2　協力者 2 名の事例分析

4-2-1 リーさんの事例

ここでは、リーさんの事例を分析するにあたり、まずリーさんの背景情報について以下、言及しておく。

リーさんは、先の表1に示したように、博士前期課程に在籍する大学院生である。大学院入学前に、日本語学校で2年弱の日本語学習経験があり、JLPTのN1に合格して、上級レベルの日本語能力を有する。また、博士後期課程への進学を希望しているが、まだそれ以降の進路については、漠然と日本での就職希望があるものの、全く未定である。

このように、リーさんの場合、具体的なキャリアの志望については、言語化がなされていなかったことから、本稿では、キャリア形成の具体化に進む以前のケースの一つと捉えることとした。つまり、キャリア形成に至る過程の一環として、他者との協働や交流が行われる研究室内でのコミュニケーションに着目した。研究室内でのコミュニケーションを語るリーさんが日々、周囲の言語環境や研究遂行に関わる過程に対してどのような考えを持ち、研究生活を送っているかに注目する。それによって、リーさんのキャリア形成に向かうまでの大学院生としての意識や姿勢について記述が可能であると考え、分析を進める。

以下、リーさんについて、研究室内で行われているコミュニケーション上の使用言語の選択や調整に絞ってSCATを援用して分析を行い、ストーリーラインを4つに分けて記述する。ストーリーラインの中の【　】内には、SCAT分析で得られた「テーマ・構成概念」を示す。

【コミュニケーションのための使用言語の選択】については、【場合により使用言語の難易度調整を行う教員と研究室メンバー】に恵まれ、同メンバーによる【使用言語に関する配慮】から、【優しいという印象】を持つ。具体的には、一般的に日本語を用いることも多いが、【日本語で十分に伝わらない場合に使用する英語】も活用し、【日本語と英語の使用言語の使い分け】が柔軟に行われている。基本的には【発表と実験の際に使用する言語】として日本語を位置付けており、不明な場合に英語を活用することもある。また、【チューターによる工学日本語に関する学習支援】も受けており、専門的な活動に必要な日本語学習のサポートも得られている。

リーさんは、以上のように研究室での活動において、指導教員や研究室メンバーから、日本語か英語か一辺倒ではない言語選択に関する配慮があることを認識している。リーさんは、それに感謝する態度で上記のように語っていたが、一方で、次のような簡単な日本語ではわからず英語での意思疎通が成功しない場合の存在にも言及していた。

「えっと研究室での生活は大丈夫です。あのみんなが優しいから、あの簡単な日本語で話します。私と話します。あの先生も英語とあの簡単な日本語で話します。
（中略）あの簡単な日本語で説明できない時も他の英語とかの言葉で話せないから、ちょっと理解できない時もあります。」

リーさんの場合、本人の日本語能力に配慮した周囲の研究室メンバーが、日本語の難易度を下げてコミュニケーションを図ろうと努力している様子がうかがえる。その一方で、研究の内容については厳密に正確に伝え合う必要があり、そこでは、日本語では伝え切れない場合、他者の英語能力の高低も、双方の理解に影響を及ぼすものとなる。つまり、このような場面では、やさしい日本語か英語で、といった単純な２択だけでなく、コミュニケーションを行う関係者双方の言語能力の高低も、互いの理解の程度に深く関与するものと言える。換言すれば、こうしたコミュニケーションにおいては、内容や相手によって、しばしば言語が選択的に使用される状況であり、単純な基準で言語をスイッチすればよいわけではない。

次に、研究室で「発表」が行われる際の使用言語についても、言語の使い分けがあるという。

【日本人学生と留学生の発表時の使用言語の差異】が見られる。具体的には、【ドクターに限り大学院生の英語使用】が行われている。【ドクターに留学生が多い状況】が見られるが、ドクターの日本人学生も英語で発表する。つまり、【在学段階により異なる使用言語】の存在が指摘できる。リーさん自身は、発表時の使用言語は、英語でも日本語でも問題ないと考えており、将来的に【博士課程進学後における日本語による発表】を希望している。

上述の通り、英語プログラム在籍の大学院生であれば一層、在学段階が上がれば、成果発表も英語で行われる傾向がさらに高まると考えられる。ただし、リーさん自身は、発表は日本語でも英語でもできると言っており、「ドクターになったら１回か２回日本語で発表したいと思います」と希望を明言していた。このように、博士後期在籍の大学院生の発表時英語使用の傾向がある現状とは別に、リーさんは、個人的に日本語を用いた発表を試みたいという希望を持っていることがわかった。

上記のような日本語での発表を希望するリーさんは、一方で、発表と質疑という口頭コミュニケーションの際の英語使用の有利な点、日本語使用の難しい点、および各々の背景について語っている。次に該当部分を取り上げる。

【発表時英語使用の有利な理由】として、【英語語彙の理解の容易さ】が指摘できる。それは一方的な発表だけでなく【専門的な議論を英語で行う容易さ】にも通ずると考えている。日常生活は日本語で事足りるものの、発表と質疑の場面では英語使用の場合と比べて困難な場合が存在する。日本語による発表では、【受信時に困難な漢字語彙】の存在が指摘できる。つまり、【漢字語彙の日本語での読み方】が理解できず、【日本語による口頭コミュニケーションの理解が困難な状況】にある。【発表スクリプトの文字による内容確認が可能なら理解可能】である。このように、【漢字語彙の文字による理解が容易な中国語話者】にとって【漢字語彙の日本語読みは推測できず困難であるとの指摘】がなされた。

上記の状況について、学部時代にも英語コースを受けた経験を持つリーさんは「専門なところは英語で話せたら楽かな」と述べ、さらに次のように語っている。

「日本語の発表はあんまり漢字が多い時、漢字が見たらわかるんですけど、読み方はわかんないであの日本語の発表は聞いたらあんまりわかりません。あの英語だけであのできます。（中略）漢字自体はほとんど同じです。でも読み方は全然違うから。」

漢字系出身者のリーさんは、漢字語彙が音声で発せられた場合には、その日本語読みが十分に習得できていないために、理解が困難になることを示している。そのことが、口頭表現上の英語使用が「楽」であると考える理由である。

さらに、音声コミュニケーションでは、日本語の文末文体に関する学習状況等について次のように指摘がなされた。

【大学院入学前の日本語学校時代に丁寧体のみ学習した経験】を有する。当時は【教員も学生も常時使用していた丁寧体】が通常のスタイルと認識していた。その後、大学院に入学後、【相手により変える待遇表現】の存在を認識し、【相手が先輩か後輩かで文末文体の選択に見られる差異】について意識化が進んだ。【過去の研究室での経験】では、【文末文体としての丁寧体使用が相手との距離感を生む感覚】を覚え、【普通体より丁寧体の方が相手との距離が遠いという感覚】を持つようになった。

上記のように、日本語学校在籍時には、教員も学生も丁寧体のみ使用していた経験から、リーさんはそのようなコミュニケーションに慣れていたが、大学院入学後、相手によって文末文体を使い分ける必要性を認識するようになった。その結果として、以前所属していた研究室では、丁寧体を使用すれば、普通体の場合より「相手との距離が遠い」という感覚を持つようになったという。

このように、リーさんは、コミュニケーションの相手により文末文体を選択的に使用することで、相手との距離感の違いが存在することへの意識が芽生え、その感覚に慣れるようになる。これは、特定の研究室内のコミュニケーションの慣習ではなく、日本語を用いて相手との交渉や協働を行う社会人としても求められるものである。リーさんは、研究室における言語コミュニケーションを通して、そこに関わる他者と、他者との人間関係の構築や円滑化にも繋がる文末文体の使用を意識するように、意識が変容してきた様子がうかがえる。

4-2-2　アンさんの事例

アンさんは、南米のある国の出身の大学院生である。日本のポップカルチャー等に高い関心を持ち、日本語学習も継続してきた結果、日本語能力はJLPTのN1に合格しており上級レベルである。

以下に、アンさんの日本語学習や日本への興味関心、また日本語と英語の使用に関する選択や関連する研究室の状況について示す。

【子供の頃から日本のドラマ、アニメ、音楽に関心を持ち独学で日本語を学習】してきた。【子供時代からの日本文化への強い愛着】がある。一方で、【実利性を説き英語学習を勧める母親】の存在もあり、英語学習も継続してきた。大学院・研究室では【専門用語としての英語使用と自然に話せる日本語使用】として、目的により言語を選択的に使い分けている。【日本語によるコミュニケーションが取れることへの喜び】も感じている。

上記の通り、アンさんは、留学前から日本語や日本文化への愛着があり、母親から勧められる英語学習を行いつつも、自身の強い興味関心から途絶えることなく日本語学習に取り組んできた。その結果、授業や研究室内では、「専門用語」の重要性を認識して英語を使用する場合と、むしろ「自然に話せる」日本語の両方を使い分けており、以下の語りのように「日本語使用の喜び」も感じている。

> 「英語の授業で、その子もあの英語めちゃくちゃうまくて、でもその私はまあ日本語まだ覚えてるって知っててそれ知っても日本語で話してくれるのがめっちゃ嬉しかったです。」

英語能力の高い日本人学生が、アンさんが日本語学習を行っていることを知った上で「日本語で話してくれるのがめっちゃ嬉しかった」と語っている。先方の学生がアンさんの興味を理解した状況の中で、自分が自然に話せる日本語により意思疎通ができた喜びが語られている。

一方で、アンさんは、英語を用いることで「楽になれる時間」があるという指摘も以下のように行っている。

研究室では、【高い言語能力を有する頼れる他国の先輩の存在】もあり、【研究室メンバーによる、内容の難易度が高い専門授業の理解へのサポート】にも感謝の気持ちを持つ。【大多数が外国人の友人との使用言語が英語である環境】の中にあって、【日本語使用より英語使用の方が楽になれる時間】がある。それは、【外国に暮らすがゆえの苦労の経験】を共に有し、また、【外国人同士で日本での生活上の苦労を分かち合える関係性】があるためである。

このように、アンさんは、強い愛着を持つ日本語に対し、日常の研究生活上で「楽になれる英語」の存在感についても言及している。アンさんをそのような気持ちにさせるのは、英語を用い、時にはサポートもしてくれる周囲の外国人が、【外国に暮らすがゆえの苦労の経験】を共有する仲間であるという関係性を認めているためで、仲間同士の共感が土台にあるものと言える。

さらに、就職に関しては、アンさんの中で逡巡があった。調査時には、日本企業ではない外資系企業への希望を持っていた。その背景には、日本企業の場合とは異なる外資系企業への魅力を感じ、加えて、自身の年齢についても不安を覚える状況があったためである。

【以前より持っていた海外の会社への就職希望】があり、また、【研究開発には就かないというキャリアの変更】も視野に入れていた。【就職活動に際してのYouTubeを通じた情報収集】を行い、【就職関連の日本の文化・考え方・応募年齢】についても情報を精査した。アカデミアを志向しない場合、【日本での新たなキャリア形成に対して抱き続けてきた不安】がなくならず、【年齢がキャリア形成の足かせになるとの怖さ】も感じている。同時に、【大学院での研究活動と関係のない就職先選択の可能性への不安】もあった。

アンさんは、上記の通り、日本での就職の場合、アカデミアに進まない選択の場合について懸念を抱いている。例えば、以下のように語っている。

「やっぱりあの今はX歳なんですけど、それが一番悩んでたことですよね。あの日本では、あの全部あの年齢から決まっているのであのX歳で新しいキャリアを始めるのが。ちょっと怖いんですよね。」

「もしもしかしたらもう全然。今まで勉強したことと関係ない仕事をしたくなったらどうしようかなって。」

上記のように、日本で就職する場合には、年齢や職務内容に関する不安が増大しているように見られる。このことに関しては、次に示すように、過去にインターンシップを経験した際に、日本語能力を有する外国人に何が期待されるのか悩んだことも背景にあった。

【自分のように日本語能力を持つ外国人に対する企業からの期待や将来のキャリアが見通せない不安】を持っていた。【年齢の高低や役職の上下により期待される役割】もつかめなかった。これらは、【日本の企業での外国人のポジションを含むチャレンジの機会がつかめずに悩んだ経験】であった。その間、【これまでの経験をふまえた自身への内省】を続け、また、【キャリア形成に際しての自身の意思や自身に必要なものへの探索の意義】を求め、【人生で「好きなこと」に取り組みたい希望】を持つようになっていった。

アンさんはこのように抱えていた悩みについて、次のように赤裸々に語っている。

「私、あの働いてた時はあんまり何を期待されてるのかわからなかったです。あの外国人として、この日本語のレベルで何を期待されてるんですか？あたし、これからのキャリアどうすればいいのかなって。それも知らなくて。」

「どんな機会があるのか思って、あのチャレンジできることも、あのどんなポジションチャレンジできるかなって。あのずっと研究者でいるしかないのかって、それも結構悩んでいましたね。あの外国人には、あのどんなチャレンジができるのかって？」

「今は多分もっと前よりあの自分を。知ってると

思います。あの自分の意思とか、自分の何が必要なのか、自分の好きなこととか、やっぱりあのあの自覚したのはやっぱり人生は短いし、今やることをあのやりたいことをやりたいと思って。」

このように、アンさんは過去の企業での経験から、自分のような外国人への企業からの期待がつかめず、また、キャリアに関しても長く内省と思索を続けた結果、短い人生で「好きなこと」に取り組みたいという結論に至っている。

4-3　協力者２名の事例の総合的考察

リーさんは、博士前期課程で学び、博士後期への進学も希望する大学院生であり、研究室の言語環境にも恵まれて研究室のメンバーに感謝しつつ日々を過ごしている。英語と日本語を使い分けつつ過ごしているが、一方で、日本語の場合は漢字語彙の読み方がわからず、発表や質疑を音声媒体で理解しようとすると、困難が伴う状況である。また、研究室でのコミュニケーションの観察と経験から、日本語の文末文体の使い分けによる、相手との心理的な距離の取り方について学ぶようになった。このようにして、リーさんは、自身の日本語能力を分析して弱点を言語化し、かつ、キャリアについては全く未定で漠然とはしているものの、言語コミュニケーションや対人関係の取り方を徐々に学びつつ、将来に備えている状況であると言える。

一方、背景的には対照的なアンさんは、独学で楽しみながら日本語を学び、日本文化に傾倒し、日常生活でも好んで日本語を使用していた。他方で、一定以上の英語能力も獲得し、日常的な研究活動では他の留学生とも交流を深め、有意義な大学院生活を送っている。その過程で、日本企業での経験を振り返りつつ、自身の年齢と今後のキャリアについて悩み続けてきた。大学院修了後の見通しとしては、逡巡はあったものの、アカデミアを志向せず、日本での就職を考えていない。むしろ、より多文化的な状況における海外の企業において、共感を抱きやすい外国人との協働を目指すことを検討している。

以上の、対照的な２名の事例分析から、キャリア形成支援には、当該の留学生の日本文化に対する好みや言語能力の高低もプラスに関与するものであると推測されるが、そのことがキャリア形成支援の本質ではないであろう。むしろ、個々の研究室での日々の生活やインターンシップといった学外での経験も含め、留学生が自身のキャリアを、自身の留学経験からどう志向し、そのために何が必要であるかを熟考する過程を、十分に経験しつつキャリア形成への意義づけを行うことが重要であると考えられる。

その過程においては、さまざまな思考や行動が求められる。例えば、言語コミュニケーションや制度や組織等の中にある他者との関係を考え、可能性のある職場の観察や情報収集を行った上で、経験を蓄積する研究生活にある自分自身を、どのように将来の自分に繋げていくかについて深く思考し、苦悩の末にでも責任をもって最適な解を選び取ることを潔しとする自覚と決断が重要であると言える。

5　まとめと今後の課題

以上、英語プログラムの在籍留学生へのアンケート調査とインタビュー調査の結果をまとめて議論を行った。

アンケート調査からは、英語プログラムの留学生の多様な背景や、選択的な言語使用、キャリア形成への迷いや悩み等の実態が明らかにされた。キャリア形成に向かう過程では、進路を決断するためにも、日本語か英語か等の言語選択も看過できない要因であることがわかった。

また、２名の留学生へのインタビュー調査の結果分析を通して、大学院生は、研究生活上の長い期間の各局面において変容する自身を自覚して内省する必要があることがわかった。そのことから、キャリア形成支援は、言語学習や研修の機会等の少数の容易な選択肢をパッケージとして提供するものではなく、留学生自身に、内省を促し、自身の選択に根拠を持たせて言語化できる程度に深く思考することへ誘う支援であると考えられる。大学院生の研究生活には多様な背景や局面があるため、このような支援の過程を安易にパターン化することはできない。今後も、さらなる質的研究を通して、大学院生が苦悩する背景、原因、問題を克服した結果とそれまでの過程等を明らかにすることが、キャリア形成と日本語学習を検討する上で求められるものと言える。

付記

本論文は、第26回専門日本語教育学会研究討論会（2024年3月2日於：立命館大学大阪いばらきキャンパス）において発表した内容に大幅な追加、修正を加えたものである。また、本研究はJSPS基盤研究（C）22K00637の助成を受けている。

参考文献

大谷尚（2019）『質的研究の考え方──研究方法論からSCATによる分析まで──』名古屋大学出版会

坂井伸彰（2021）「英語プログラムを含めた留学生支援体制の検討──留学生の進路・生活相談アンケートを基に──」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』8，pp.17-26.

重田美咲（2008）「工学系研究室における博士課程留学生の生活調査」『専門日本語教育研究』第10号，pp.35-40.

卓妍秀・村岡貴子・福良直子・和嶋雄一郎（2024）「理工系大学院における英語プログラムの留学生の日本語学習の位置づけとその意義──キャリア形成を視野に──」『第26回専門日本語教育学会研究討論会誌』pp.27-28.

寅丸真澄・江森悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子（2019a）「留学生のキャリア意識とキャリア支援の「ずれ」を考える 日本語学校・短大・大学（首都圏・地方）の留学生の語りから『言語文化教育研究』16，pp.240-248.

寅丸真澄・家根橋伸子・松本明香・佐藤正則（2019b）「留学生のキャリア支援の実態と課題──日本語教師と学習者の意識の「ずれ」に着目して──」『2019年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 86-91.

寅丸真澄・齊藤千鶴・中島智・中本 寧・松野芳夫・佐藤 正則・松本明香・家根橋伸子（2023）「留学生のキャリア形成支援のための組織横断的な支援システムの構築──日本語学校・大学・大学院の事例から人・組織・機関・社会の連携を考える──」『言語文化教育研究』第21巻，pp. 278-296.

鍋島有希（2015）『外国人社員の「職場における学習」と大学教育に関する研究：日本企業の人材育成で起こるコンフリクトに着目して』九州大学博士論文

羽吹幸・篠原亜紀（2014）「理工系大学院留学生の日本語使用に関する一調査」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号，pp.131-144.

Everett C. Hughes（1958）"Men and their work" Forgotten Books

深川美帆・高畠智美（2018）「理工系大学院留学生を対象とした日本語教育のニーズとコースデザイン」『金沢大学留学生センター紀要』21, pp.15-27.

堀内喜代美（2021）「英語学位プログラムの動向と課題」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要　教育学研究』2，pp.16-25.

マーク・L・サビカス（2015）『サビカス キャリア・カウンセリング理論〈自己構成〉によるライフデザインアプローチ』乙須敏紀訳、福村出版

宮城まり子（2002）『キャリアカウンセリング』駿河台出版

村岡貴子（2003）「日本の理系大学院で学ぶ留学生の専門日本語コミュニケーション」『社会言語科学』第6巻第1号，pp.99-111.

村田晶子（2024）「英語学位生にとっての「日本語」というグレーゾーン　学生たちの4年間の葛藤と変容」村田晶子・神吉宇一編著『日本語学習は本当に必要か　多様な現場の葛藤とことばの教育』明石書店，pp.29-47.

日本学術振興会（2024）「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」https://www.jsps.go.jp/j-social-i/〈2024年12月13日アクセス〉

湯川恵子（2020）「日本企業における外国人材受け入れの現状に関する研究」『日本経営診断学会全国大会予稿集』pp.57-60.

渡部裕子（2020）「留学生の「定着」に関わる「主観的キャリア」研究の課題と展望──日本語教育からのアプローチ──」『長崎総合科学大学紀要』第60巻 第2巻，pp.101-110.